

# ひ うん かく 飛雲閣



修復情報

素屋根編

2017年7月より飛雲閣の修復が始まりました。

前回の修復から約20年ぶりで、屋根の葺き替えを中心に2020年3月まで修復を行います。



## ◀ 工事に向けての諸準備

もうろうち  
滄浪池(池)の水をぬいて  
修復準備完了！  
素屋根建設工事スタート！



## ◀ 8月28日 すやね素屋根建設開始

滄浪池(池)の上に飛雲閣までの通路となる橋やステージを作り、丸太などの資材を置いていきます。  
とび  
鳶さん(高所作業を専門とする職人)が丸太を軽々と運んでいます。

すやね  
素屋根

今回の修復では、まず「素屋根」を建設します。素屋根は、修復の期間だけ建て、屋根葺き替え中の建物を雨や風から守るほか、建物の解体・組立のときの足場や、材料の保管・加工の場所として使われます。



# 丸太

鉄骨で素屋根を建てることも可能ですが、木を使う技術を次世代に残していくために、京都府の文化財修復の現場ではあえて木材（丸太）を使用した伝統的工法を取り入れています。

◀9月1日

丸太を組みはじめました。



◀それぞれの丸太に曲がり方などのクセがあるので、<sup>とび</sup>鳶さんはそれを見極めながら組み合わせます。



◀番線(太い針金)で、丸太にくい込むほどぎゅーっくとくられています。昔は<sup>つる</sup>蔓や縄だったようです。





◀9月8日

---

一層目が丸太で囲われてきました。



◀9月19日

---

とび  
鳶さんは丸太の上をすいすい歩き、  
作業をします。

美への  
こだわり

美しく仕上げるため、丸太の<sup>ろく</sup>陸(水平)と<sup>た</sup>建ち(垂直)を  
メジャーと目の感覚をたよりに調節します。



強度の高い足場を組む技術が受け継がれています。

# 伝承の 格子模様



クレーンを使わず、すべて手渡し。  
手作業で組み立てています。



## ◀9月20日～24日

修復現場の特別公開を行い、  
6000人以上の方々にお越しいただきました。  
記念に飛雲閣ペーパークラフトをプレゼントしました。



▲飛雲閣ペーパークラフト





高さ  
15m

見上げる高さで作業が進みます。



◀9月28日

高さ15メートルに到達！  
飛雲閣全体が丸太で覆われてきました。



◀10月3日

塀の向こうからでもよく見えます。  
(御影堂横スロープから)

## ▼10月12日

おうかくだい つげたりかいろう  
黄鶴台につながる廊下(附廻廊)の屋根  
の葺き替え工事も今後行います。



## ◀10月14日

強度を高めるため、丸太を細かく連結しながら補強していきます。

丸太の密度が高くなり、飛雲閣の全景が見えにくくなりました。



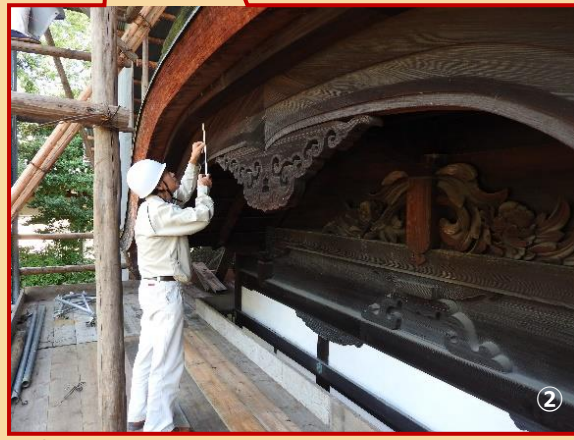
## ◀10月23日

風雨をしのぐための仮設の屋根が取り付けられました。

一部、防災メッシュシートがかけられ、作業もラストスパートです！



# 素屋根の内部に入ってみましょう！



▲京都府文化財保護課の森田さん。  
本願寺の修復事業を担当する技術者です。

①  
まずは階段をあがります。  
この階段は一層目と二層目の足場へ行くための階段です。

②  
一層目の足場を進み、普段は何気なく見ている唐破風からばふを近くで見ると、その重厚さや飾りげぎよ(懸魚)の大きさに驚きます。



③

二層目の足場へ続く階段をあげると、一層目の屋根の上に広い空間があります。素屋根にこのようなスペースができるのは珍しく、飛雲閣の独特な形(左右非対称)によるものです。



④

二層目の足場を進むと...  
二層目が歌仙之間と呼ばれる由来である杉戸に描かれた歌仙像(レプリカ)が目の前に。



向かって左が藤原仲文、  
右が大中臣能宣です。  
他にも紀貫之や小野小町も描かれています。



⑤

さらに進むと...





⑥  
とび  
鳶さんです！お仕事を  
見学させていただきます。



⑦  
この足場からは、普段は見あげてい  
る御影堂の屋根が、同じくらいの目  
線で見えますね！



⑧  
丸太は長さ6メートルを基本とし、  
必要に応じて丸太を切り、組み合  
わせて使用します。

ここでは、丸太を連結した部分の  
番線(太い針金)を二人がかりでき  
つく、きつく締めています。



▲隙間なくしめられた番線





下からの支えがなく、上から吊られた状態

⑨

この足場は、上から吊り下げられている「吊り足場」です。下からの支えがない分、緩みや隙間のないよう、しっかりと番線を締めます。

「空に浮かんで飛んでいる雲のような印象を受ける」ことが名付けの理由ともされる飛雲閣に、この「浮かぶ足場」はピッタリですね！



⑩

最後に三層目の足場へあがります。



⑪

三層目の足場です。初めは、このような仮の床板(※⑫)を敷いて作業が進められていましたが、今ではきれいに整えられたため、高所でも安心して歩けます。

▼森田さんは軽快に進まれます



手すりにつかまり、やっと渡りました... (筆者体験談)

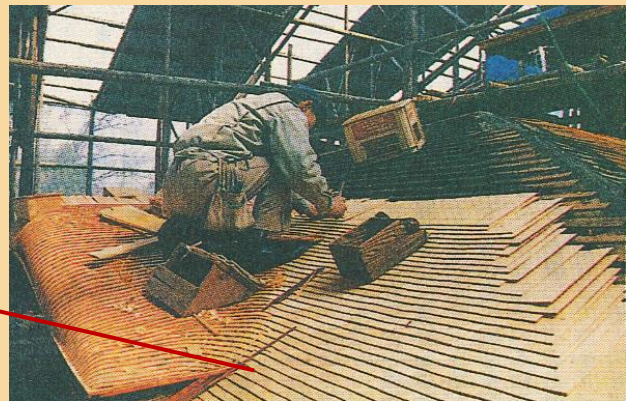




⑬

こけら葺きがかなり傷んでいます。雨漏りしていたため、平成 28 年に金属板を敷いて、一部応急処置を行いました。

葺き替えたばかりの屋根と比べると、傷みがよく分かります。



▲前回修復時の屋根葺き替え工事の様子  
(本願寺新報 1994 年 6 月 20 日号より)

こけら葺き屋根は日本で古くから使われてきました。

サワラの木を用いていますが、このように瓦などと比べ耐久性の低い材料を、国宝など最高級の建物の屋根にごく普通に使用しているのは日本の伝統文化です。

それは、造りのやわらかさや美しさが、日本人独自の感性やぬくもりを表現しているからでしょう。

文化財保護課の森田さんは

「修復する建物から、昔の人の当時の思いやぬくもりを感じ、そのぬくもりを次世代へ残していきたいんです」と、飛雲閣を大事そうに見つめながら話してくださいました。

先人から伝えられてきた歴史や文化を大事にし、保存していかなければならないですね。

素屋根内部のご案内は以上です。



## ◀ 10月31日

御影堂から見ると、もはや別の建物があるようです。

とび  
鳶さんが屋根で避雷針の確認作業をされています。



いよいよ正面にも防災メッシュシートがかけられました。



とび  
鳶さんが丸太にまたがり、シートをくくりつけていきます。

この後、屋根の葺き替え工事が終わるまで、飛雲閣はシートで被われます。





### ▲12月4日 素屋根建設完了

自動火災報知機などの諸設備を整え、飛雲閣の素屋根は完成しました。  
使用した丸太は約1500本にもなります！  
今後は、この素屋根の足場を使用し、屋根の葺き替えなど修復を行います。



工事を担当していただいた  
株式会社 測上の皆さん、  
ありがとうございました！

▲工事主任 測上倫秀さん(向かって左下)と職人の皆さん

飛雲閣修復情報(素屋根編) END